

「資本論を読む会」便り

2025.2.22 No. 95

1月は次の箇所を読みました。

第Ⅰ部：第1篇 第1章 第3節 Aの一 ～ Aの二 a の初めまで

第Ⅱ部：第3篇 第12章 第3節 の後半 ～ 第4節 の初めまで

※ 編集人の復習ノート。報告や議論などを基に、要点を簡単に紹介します。
段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと傍注の付け方で区切っていますが、原則通りでない場合もあります。段落番号の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしなどです。

第96回

第Ⅰ部 第1篇 第1章 第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

X量の商品A=Y量の商品B または X量の商品AはY量の商品Bに値する。
(20エレのリンネル=1着の上着 または 20エレのリンネルは1着の上着に値する。)

一 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

第1段落 (63)「すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちに…」 ～

●単純な価値形態の分析には固有な困難がある。

価値形態はいくつかあり、この第3節は $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ と順に進んで行きます。これらすべての価値形態の秘密は、単純な価値形態の内に潜んでいます。だから単純な価値形態の分析は手強いぞ、ということでしょう。

第2段落 (63)「ここでは二つの異種の商品AとB、われわれの例では…」 ～

- リンネルは自分の価値を上着で表わす。上着はこの価値表現の材料である。
- リンネルと上着は、単純な価値形態の中で二つの異なった役割を果たしている。

リンネル

- ・自分の価値を表わすという、能動的な役割を演じている。
- ・自分の価値を他の商品の価値で表わしている。つまり相対的に価値を表している。
- ・リンネルは相対的価値形態にある、と言う。

上着

- ・リンネルの価値を表現する材料であり、受動的な役割を演じている。
- ・リンネルの価値に等しい物として登場している。
- ・上着は等価形態にある、と言う。

第3段落 (63)「相対的価値形態と等価形態とは、互いに属しあい…」 ～

相対的価値形態にある商品と等価形態にある商品の関係

- 相対的価値形態と等価形態は密接不可分で、互いに属しあい制約している。
- 相対的価値形態と等価形態は、対極的である。
 - ・リンネルの価値は相対的に、つまり別の商品によってしか表現できない。
 - ・故に、相対的価値形態は、別の商品が等価形態にあることを前提とする。
 - ・等価形態にある上着は、価値表現の材料となっているだけである。
 - ・上着は自分の価値を表現していないから、等価形態であると同時に相対的価値形態である、ということとはできない。

第4段落 (63)「もちろん、20エレのリンネル＝1着の上着 または、…」 ～

- 20エレのリンネル＝1着の上着 (1)
 という式は
 1着の上着＝20エレのリンネル (2)
 という逆関係を含むが、(1)はリンネルの価値を、(2)は上着の価値を、表わす。
- (1)に於いても(2)に於いても、同じ商品が同時に相対的価値形態かつ等価形態とはなれない。

第5段落 (64)「そこで、ある商品が相対的価値形態にあるか、反対の…」 ～

- ある商品が相対的価値形態にあるか、等価形態にあるかは、価値表現の中でのこの商品の位置だけによって定まる。
 言い換えると、その商品が自分の価値を表現されているのか、その商品によって別の商品の価値が表現されるのか、ということだけによって定まる。

二 相対的価値形態 a 相対的価値形態の内実

第1段落 (64)「一商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係の…」 ～ (注17)まで

- 一商品の単純な価値表現が、二商品の価値関係のうちにどのように潜んでいるのかを見つけるには、まず、量的な面から離れて考察しなければならない。
- なぜなら、いろいろな物の大きさは、それらが同じ単位に還元されて初めて量的に比較されうるからである。
- 人々はこのことを見落として正反対のことをやり、価値関係のうちに単に二つの商品種類のそれぞれの一定量が互いに等しいとされる割合だけを見ている。

ここに出てくる「単位」は、kg とか m³ などではなく、重さとか体積などのような「大小比較できる同じ種類の質」と考えると分かりやすいと思います。

第2段落 (64)「20エレのリンネル＝1着の上着 であろうと、＝20着の上着 …」 ～

- リンネル＝上着 が等式の基礎である。
 つまり、
 リンネルも上着も価値という同じ質を持っている。
 価値は量として比較できる。
 ということである。

第Ⅱ部 第3篇 第12章 分業とマニファクチュア

第3節 マニファクチュアの二つの基本形態 ——異種のマニファクチュアと有機的マニファクチュア

レポーターによる前回の復習から始まりました。そのあと、いろいろな本を読まれている参加者のお一人から、マニファクチュア関連で、資本主義がなぜイギリスで発展したかのお話がありましたが、興味深いお話でした。資本論第1巻の最後にある「第24章 いわゆる本源的蓄積」にも関わるかなと思いました。

第12段落 (369)「マニファクチュア時代の独自の機械は、…」 ～ (注47) まで

- マニファクチュア時代の独自の機械は、多数の部分労働者の結合された全体労働者そのものである。
- マニファクチュアでは、種々な作業が分離・独立化されており、労働者をそれぞれの能力に見合った労働に割り当てられることが可能となる。部分労働者は、それぞれの特殊な機能にだけ適した労働力へと発達させられる。
- 部分労働者は、全体の機構の中でそれぞれの特殊機能に特化された部分作業を専門に担い、全体として各々の作業のバランスを整え、もっとも経済的に労働を支出するようになる。
- マニファクチュア的な全体機構は、部分労働者を一面的な機能に限定し、彼を一面的な機能を担う器官にする。他方、全体機構との関連のなかでは、部分労働者に、機械の一部品であるかのように規則正しく作業するよう強制する。

この「独自の機械」はフランス語版では「独自の機構」となっているそうです。

第13段落 (370)「全体労働者のいろいろな機能には、簡単な…」 ～ (注48) まで

- マニファクチュアの部分労働力には単純なものもあれば複雑なものもある。それを担う部分労働者の養成には異なる期間が必要となり、労働力の価値が違ってくる。ここから、賃金の等級制が生まれ、労働力の位階制も生まれてくる。
- 誰でもやれるような簡単な作業も、全体労働者の一部分機能として分立し、部分労働者の専有の機能として固定されるようになる。

第14段落 (371)「それゆえ、マニファクチュアは、それが…」 ～ (注49) まで

- マニファクチュアは熟練労働者と非熟練労働者の区別を生むが、このことが資本の価値増殖能力を高める。その理由は、
 - ・熟練労働者の修業費は、手工業者の場合と比べ、少ない(部分労働だから)。
 - ・非熟練労働者の修業費は、ゼロである。ということなので、労働力の価値を減価させ、剰余労働を拡張させるからである。
- 労働力の価値減少の例外となるのは、労働過程の分割から「新しい包括的な機能」(管理・監督機能)が生じる限りでのことである。

第4節 マニファクチュアのなかでの 分業と社会の中での分業

第1段落 (371)「われわれはまず第一にマニファクチュアの起源を、次に…」 ～

- この節では、マニファクチュア的分業と商品生産の一般的基礎をなす社会的分業との関係に簡単に触れる。

第2段落 (371)「ただ労働そのものだけを眼中におくならば、…」 ～ (注50) まで

- 労働に注目した分業の区分
 - ・一般的分業：社会的生産の大きな区別……農業と工業
 - ・特殊的分業：一般的分業内部での区分……農業：牧畜、農耕
工業：鉄鋼・石炭等の製造、機械等の製造

- ・個別的分業：一つの作業場内における分業

第3段落 (372)「社会のなかでの分業と、それに対応して諸個人が…」 ～ (注50a) まで

- 社会的分業、および、それに対応して個人を特殊な職業部面に縛りつけられることは、マニファクチュア的分業と同様、相反する出発点から発展する。
 - (1)家族や種族の中で自然発生的に分業が発生する。
 - 性や年齢の相違から発生する。
 - 共同体の拡大や種族間の紛争などで分業の範囲は拡大する。
 - (2)生産物の交換は家族や種族や共同体が接触する地点で生じることから分業が発生する。
 - 共同体が違えば自然環境の中で見出す生産手段や生活様式や生産物の違いが生じる。
 - こうした相違が、共同体間の接触により生産物の交換を生み出す。(商品交換の始まり)
 - 生産物交換は、社会的総生産物の互いに依存しあう関係を共同体間に生ぜしめる。
 - 両共同体間に社会的分業が発生する。
- (1)の場合。
 - 共同体内分業が共同体間の商品交換によって解体し、それらの分業を独立化して商品交換を媒介したものにする。
- (2)の場合。
 - この場合の社会的分業は、もともと違ってはいるが互いに依存し合っていない生産部門間の商品交換によって発生する。

第4段落 (373)「すべてのすでに発展していて商品交換によって…」 ～ (注51) まで

- 商品交換によって媒介されている分業の基礎は、都市と農村との分離であり(農業と工業)、社会の全経済史はこの対立の運動に要約される

第5段落 (373)「マニファクチュアのなかでの分業のためには人口の…」 ～ (注53) まで

- マニファクチュアの中での分業は、一人の資本家が手工業を一つの作業場に集めることから始まる。同時に充用される労働者の一定の数がその物質的前提になる。
- 同様に、社会の中での分業は、人口とその密度が物質的な前提をなしている。(人口密度が、作業場の中での労働者の密集度に相当する。)
 - ただし、交通機関の発展度なども関係するので、人口密度というのは相対的なものである。

第6段落 (374)「商品生産と商品流通は資本主義的生産様式の一般的…」 ～ (注56) まで

- マニファクチュア的分業は、社会の中での分業が既にある発展度まで成熟していることを必要とする。
- 逆に、マニファクチュア的分業はこの社会的分業に反作用してこれを発展させ何倍にも複雑にする。いくつかの例を挙げる。
 - ・労働用具の分化につれ、労働用具を生産する産業が分化する。
 - ・マニファクチュアの経営が本業と副業へ独立化する。
 - ・部分労働生産物が製品である場合は独立化が進む。(時計製造：独自の手工業として独立)
 - ・同じ生産部門で原料によりいくつもの製品を生産する場合は製品ごとに分化する。
 - ・特定の生産部門を一国の特定の地域にしばりつける地域的分業を進める。
- 社会の中での分業のための豊富な材料をマニファクチュア時代に供給するものは、世界市場の拡大と植民制度である。
- 分業がもたらした社会への影響……労働の専門や専業は人間を細分化する。